

1注 伍音之次第之事^①

あ	上	い	中	う	中上	ゑ	下中	を	下	シ	口少	タ	少	か	き	く	け	こ	シ	口少	タ	少					
さ	し	す	せ	そ	シ	口少 ^②	タ	少	た	ち	つ	て	と	シ	口少 ^②	タ	少	な	に	ぬ	ね	の	シ	口少 ^②	タ	少	
ま	み	む	め	も	ロ	ヒル	や	ゐ	ゆ	え	よ ^④	ノ	ント	ら	り	る	れ	ろ	シ	タ	わ	い	う	ゑ	お	ノ	ント

已上 1オ

1注 伍音之次第^①

あ	上	い	中	う	中上	ゑ	下中	を	下	ク	チ少	シ	タ	か	き	く	け	こ	ク	チ少	シ	タ												
さ	し	す	せ	そ	ク	チ少 ^②	シ	タ	た	ち	つ	て	と	シ	タ	ノ	ンド ^③	字	下	な	に	ぬ	ね	の	シ	タ	ノ	ンド ^③	字	上	1オ			
ま	み	む	め	も	ク	チビル	は	ひ	ふ	へ	ほ	ク	チビル	や	ゐ	ゆ	え	よ ^④	ノ	ンド	ら	り	る	れ	ろ	シ	タ	わ	い	う	ゑ	お	ノ	ンド

已上

注 拾は五十音をすべてカタカナ書きとする

① 東に同じ、但し「五音之次第」ごいんのしだい

② 少→ナシ

③ 般に同じ

④ やゐゆえよ→ヤ井ユヨ

2注①一、五音内六次第、

コウ内、セツ内、キ内、ハンセツ内、ビ内、先セツ、
右是ヲ内六ト云①、

①一、第一、こう内②と云五音ハ、わいうゑを、やいゆゑ
よ③、此五音をは、のんどにあたつて云文字也、一字づゝ
のんどにあてゝ云へき也、

②一、第二、せつ内④と云五音ハ、たちつてと、なにぬねの、
らりるれる、是は⑤したに能々⑥あてゝ云べきなり、した
にそと⑦1ウあつれば、文字きこえずして正字聞えず⑧、

③一、第三、きなひ⑨と云五音ハ、はひふへほ、まみむめも、
此文字ハ⑩、口びるぎハ⑪にあてて云文字也、

④一、第四、はんせつ⑫と云五音ハ、あいうゑを、かきくけこ、
さしすせそ、是文字は、口にてしたを⑬少あつかひて云文
字也、此五音のおや字に、あいうゑを、かの⑭五字をき
はめぬれば、よろづに渡るべし⑮、
2オ

⑤一、第五、びない⑯と云五音ハ、いきしちに、ひみいりい、
うくすつぬ⑰、ふむゆう⑱、此文字ハ、いかにもく、は
な⑲にかけて云也、

⑥一、第六、せんせつ⑲と云五音ハ、たんちんつんてんとん、
なんにんぬんねんのん、らんりんるんれんろん、

2注①一、五音内六次第、1ウ

コウ内、セツ内、キ内、ハンセツ内、ビ内、先セツ、
右是ヲ内六ト云①、

①一、第一、こうなひ②といふ五音ハ、わいうゑを、やいゆ
ゑよ③、此五音をば、のんどにあたつていふ文字也、一
字づゝのんどにあてゝいふべき也、

②一、第二、ぜつなひ④といふ五音ハ、たちつてと、なにぬね
の、らりる2オれる、是は⑤したによく⑥あてゝ云べき也、
したに、そと⑦あつれば、文字不聞して正字不聞⑧、

③一、第三、きなひ⑨といふ五音ハ、
はひふへほ、まみむめも、此文字ハ⑩、くちびるぎわ⑪に
あてゝいふ文字也、

④一、第四、はんせつ⑫といふ五音ハ、あい2ウうゑを、か
きくけこ、さしすせそ、是文字ハ、口にてしたを⑬少あ
つかひていふ文字なり、

此五音のおや字に、あいうゑを、かの⑭五字をきはめぬれ
バ、方にわたる也⑮、

⑤一、第五、びなひ⑯といふ五音ハ、
いきしちに、ひみありい、うくす3オぬ⑰ふむゆう⑱、
此文字ハ、いかにもく、はな⑲にかけていふ也、

⑥一、第六、せんせつ⑲といふ五音ハ、
たんちんつんてんとん、なんにんぬんねんのん、らんりん
るんれんろん、

注 拾は五十音をすべてカタカナ
書きとする

①云↓云也

②こう内↓喉内

③やいゆゑよ↓ヤ井ユエヨ

④せつ内↓舌内

⑤是ハ↓此五音ハ

⑥東に同じ

⑦そと↓そつと

⑧正字不聞↓たゝしからず

⑨きなひ↓牙内

⑩此文字ハ↓此五音ハ

⑪ぎハ(わ)↓きば

⑫はんせつ↓半舌

⑬したを↓した

⑭かの↓此

⑮東に同じ

⑯びない↓齒内

⑰般に同じ

⑱ふむゆう↓フムユルウ

⑲はな↓は

⑳せんせつ↓先舌

右^①此文字ハ、いかにもくしたのさきにかけて、つよく
 したにあたつて云べき也、はね字ハ、なまあたりなれば、
 そらくに成り^②て文字のハけ聞えぬなり^③、口伝在之^④、
 五音内六謳別紙有言^⑤なり、

3 一、四十五字の大事也、此四十五字^⑥にて、いきとしいけるも
 の、さへづりをなすとかや云也、上音、中音、下音の字を^⑥、
 下音に云にヨリて、文字のなまり有、上音ハ上音につゞけて
 やり、中音ハ中音にて、はたをかへずしてやり、下音ハ下
 音に云つゞくれば、なまりなし、但、のゝ字ハ下音といへど
 も、上音 3オにも用る也、又、との字、下音の中の^⑦下音也、
 謳のうちに、上音ノ文字のつゞきに、下音の文字ある所、上
 音のくらひにはだかハラすして行所を、よきふしと云^⑧、く
 せなをる^⑨に寄て、ふしよきと云なり、下音の歌^⑩、上音の
 文字、下はだかはらねば、尤いつれもよきと云^⑪、

4 注一、四十五字之次第、

あかさたな、はまやらわ^⑫、 上音^⑬、 3ウ
 いきしちに、ひみありい、 中音^⑭、
 うくすつぬ、ふむゆるう、 中音上^⑮、
 忽けてね、へめ忽^⑯れえ、 下音中^⑰、
 をこそとの、ほもよろお、 下音^⑱、

右^①此文字ハ、いかにもくしたのさきにかけて、つよく
 したにあたつていふ 3ウべきなり、はね字ハ、なまあたり
 なれハ、そらくに成て文字のわけ聞ぬ也^②、口伝あり^③、
 五音内六謳別紙有言^④也、

3 一、四十五字之大事也、此四十五字^⑤にて、いきとしいけるも
 の、さへづりをなすとかやいふ也、上音、中音、下音の文字を
 ⑥、下音にいふによりて、文字 4オのなまり有、上音ハ上音
 につゞけてやり、中音ハ中音にて、はたをかへずしてやり、
 下音ハ下音にいひつゞくれば、なまりなし、但、のゝ字ハ下
 音といへども、上音にも用也、又、との字、下音の中^⑦下音
 也、謳の内ニ、上音の文字のつゞきに、下音の文字ある所、
 上音のくらひにはだかハラ 4ウすして行ところを、よきふ
 しといふ^⑧、くせなをる^⑨によつて、ふしよきといふ也、下
 音の歌^⑩、上音の文字、下はだかはらねば、尤いつれもよき
 と言^⑪、

4 注一、四十五字之次第、

あかさたな、はまやらわ^⑫、 上音^⑬、
 いきしちに、ひみありい、 中音^⑭、 5オ
 うくすつぬ、ふむゆるう、 中音上^⑮、
 忽けてね、へめ忽^⑯れえ、 下音中^⑰、
 をこそとの、ほもよろお、 下音^⑱、

① 右↓ナシ

② そ(ぞ)らくに成て文字のハけ
 聞えぬ也↓文字聞えすして
 たゝしからず

③ 口伝在之(口伝あり)↓ナシ

④ 言↓哥(五音内六謳別紙有言
 也)なり

⑤ 四十五字↓文字

⑥ 下音の字(文字)を↓下音、上
 音の文字を

⑦ 東に同じ

⑧ 云↓いふなり

⑨ なをる↓なをり

⑩ 歌↓謡に

⑪ よきと云↓吉と云口伝在之

注 拾は五十音をすべてカタカナ
 書きとする

⑫ わ↓ハ ⑬ 上音↓上音也

⑭ 中音↓中音也

⑮ 中音上↓中音上也 ⑯ 忽↓エ

⑰ 下音中↓下音中也

⑱ 下音↓下音也

四十五字口伝有、秘へし〜、

此かしらの字、あいうゑを、是へ引てつうするを以て、四十
五字と^①知る也、朝暮心かけてたしなむべし^②、

5一、五季之五音之次第、4オ

あかさたな、はまやらわ、春の五音、上音

かんのざうのあぢハひ、すし、

双調、木、王ヲス、

夏の五音、中音、いきしちに、ひミいりぬ、是ハじんのさう、

あぢハひ、にがし、

ハ^むうしき調、火力王ヲス也、

土用の五音ハ、中音上、

うくすつぬ、ふむうるゆ、ひの臟^{ザウ}、あぢハひ、あまし、

一越調、土力王ヲスルナリ、4ウ

秋の五音ハ、下音中、

ゑけてね、へめゑれえ、はいの臟、あちハひ、からし

平調、金ガ王ヲスルナリ、

冬の五音ハ、下音、

をこそとの、ほもをろよ、腎の臟^{ザウ}、あぢハひ、しハはゆし、

盤涉調^{バンセキ}、水ガ王ヲスル也、右、是を五季の五音、上、中、

下也、

四十五字口伝有、秘へし〜、此かしらの字、あいうゑを、

是へ引てつうするをもつて、四十五字を^①しる也、朝暮心か
けてたしなむへし^②、

5一、五季之五音之次第、5ウ

春の五音上音、

あかさたな、はまやらわ、

かんのざう也、あぢわひ、すし、

双調、木、王ヲス、

夏の五音、中音、いきしちに、ひミいりぬ、しんのざう、あ
ぢわひ、にがし、

わうしき調、火ガ王ヲス也、

土用の五音ハ、中音上、6オ

うくすつぬ、ふむうるゆ、

ひのざう、あぢわひ、あまし、

一こつ調、土ガ王ヲスルナリ、

秋之五音ハ、下音中、

ゑけてね、へめゑれえ、

はひのざう、あちわひ、からし、平調、金ガ王ヲスルナリ、

冬之五音、下音、6ウ

をこそとの、ほもよろを、

腎のざう、あちわひ、しわはゆし、

はんしき調、水ガ王ヲスル也、右、是を五季の五音、上、中、
下也、

①東に同じ

②たしなむべし↓吟味すへし

(拾の第5条全文を右に翻刻する)

○五季の五音の次第

春、上音、アカサタナ、ハマヤラハ、

角、双調、木也、肝臟通也、味すし、

夏、中音、イキシチニ、ヒミイリ井、

徵、黄鐘、火也、心臟通也、味にかし、

土用、中音上、ウクスツヌ、フムユルウ、

宮、一越調、土也、脾臟通也、味あまし、

秋、下音中、エケセテネ、ヘメエレエ、

商、平調、金也、肺蔵通也、味からし、

冬、下音、ヲコソトノ、ホモヨロオ、

羽、盤涉調、水也、腎臟通也、味しハは
ゆし

6 一、文字之通ずる次第^①、

あ、あの字に^②つうする字ハ、何もく上音也、^{5オ}
あハ上音のをや字也、

い、いの字へつうする字ハ、中音なり、

いハ中音のおや字なり、

う、うの字へつうする字ハ、中音の内の上音なり、

ゑ、ゑの字へつうする字ハ、下音也、但^③下音の^④内の中音なり、

を、おの字へつうする字ハ、下音也、此五字^⑤をもつて、上音、中音、下音、引て知也^⑥、^{5ウ}

右^⑦、四十五字の大事といつは、あいうゑをの五字にきハマるなり、五字^⑧のうへにてあつかふ也^⑨、是をハ^⑩、はやく相伝させざるものなり、いかにも秘すべし^⑪、しつたんの^⑫きハめたるといふ者も、是をたやすくハしらす、師のゆるしと云ハ、是成べし、此外に五字のならひあるべからず、定次第此分別^⑬也、是をつねに覚して^⑭、人の前にて物をいうならば、字のなまる事^⑮あるへからず候^⑯、弥々相伝の口伝あるへく候^⑰、^{6オ}

7 一、序破急之心^⑱之次第、

序と云ハ、静にあるへき也、

破と云ハ、やふるかたなり、

急と云ハ、いそきつむるかた也、

6 一、文字之通ずる次第^①、

あ、あの字え^②つうする字ハ、何もく上音也、あハ上音のおや字也、

い、いの字へつうする字ハ、中音也、^{7オ}いハ中音のおや字也、

う、うの字へつうする字ハ、中音の内の上おん也、

ゑ、ゑの字へつうする字ハ、下音也、但^③下音^④内の中音也を、おの字へつうする字ハ、下音也、この五音^⑤をもつて、上音、中音、下音、ひきてしる也^⑥、^{7ウ}

右^⑦、四十五字之大事といつは、

あいうゑをの五字にきわまる也、五音^⑧のうへにてあつかふへし^⑨、是をハ^⑩、はやく相伝させざる^⑪物也、いかにもく秘へし^⑫、しつたんの^⑬きわめたるといふ者も、是をたやすくハししらす、師のゆるしといふハ、是なるへし、この外に五字のならひあるへか^{8オ}らす、定次第此分^⑭也、是をつねに覚して^⑮、人の前にて物をいふならハ、字なまる事^⑯、不可有候^⑰、弥々相伝の口伝可有候^⑱、

7 一、序破急之心^⑱之次第、

序といふハ、静にあるへき也、

破といふハ、やぶるかた也、

急といふハ、いそきつむるかた也、^{8ウ}

① 文字之通ずる次第 ↓ 文字相通の次第

② 東に同じ

③ 下音也、但 ↓ ナシ

④ 般に同じ

⑤ 此五字 (五音) ↓ 右の五字

⑥ 下音、引て知也 ↓ 下音を引しる也

⑦ 右 ↓ ナシ

⑧ 般に同じ

⑨ 東に同じ

⑩ 是をハ ↓ 是を

⑪ させざる ↓ せざる

⑫ いかにも (く) ↓ 秘へし ↓ 秘すへし

⑬ の ↓ を

⑭ 東に同じ

⑮ 覚して ↓ 覚おぼえて

⑯ 字の (字) なまる事 ↓ 字なまり

⑰ あるへからず候 ↓ 不可有之候也

⑱ 弥々相伝の口伝可有候 ↓ ナシ

⑲ 心 ↓ 心持

序ハうきやかにして、うへハしつかに①、下ハはやくあるを、序と云也②、

破と云ハ③やふると云、拍子をやふりてほとをうけ、ほとをやふりて拍子にかゝるか、拍子にかゝりていそき捨るか、ほとにかゝりてやふるもんしをまつるか、一はう破かた④ある6ウを破といひて、音曲の大事也、此道をしらすして、うたふ事はやす事あるへからず、いかにもほとよくとも⑤、又ほとをやふるとも、一拍子にはいださぬものなり、是をいハんものハへたなり⑥、ほと拍子を聞てやふりたるを、破といふなり、能⑦ならひたると云とも、ばかずふまざるハ⑧、ならひ申さざるものゝばかすふミたらんにハ、はるかおとるべし、去間、稽古を千度百度稽古する⑩、じんべんあり⑪、7オ急と云ハ⑫、詠⑬ハをそくとも、急につむるを急と云⑭、心に急を持たるを、急の段⑮と云也、

8 一、呂律之心⑯之事、呂と云事ハ、延ともいひ、静成とも云、たとへは此曲ハあまたある也、りよのこゑ、りよのふし、りよの曲と云ハ、平家のやう也、かの曲いふべき様は、文字をつよくいひかけて、延て曲をやハらぐるを、りは⑰の曲と云なり、りよのこゑと云ハ、平家のやう成るを呂の声と云也、呂のふしは、うたひにさためである也、呂角7ウと云事あり、是ハ、延てよくいひ入て云を、呂角と云也、

序ハうきやかにして、うへハ静①、下ハはやくあるを序と云②、

破ハ③やふるといふ、拍子をやふりて程を請、ほとをやふりて拍子にかゝるか、拍子にかゝりていそき捨るか、ほとにかゝりてやふるもんしをまつるか、一はう破かた④あるを破といひて、音曲の大事也、此道をしらすして、うたふ事9オはやす事あるへからず、いかにもほとよくとも⑤、又ほとをやふるとも、一拍子にハいたさぬ物也、是をいわん物ハへた也⑥、ほと拍子をきゝてやふりたるを、破といふ也、能⑦ならひたるといふとも、はかすふまざるは⑧、ならハざる⑨物のはかすふミたらんにハ、はるかおとるへし、さる間、稽古を千度9ウ百度稽古する⑩、しんへん有⑪、急といふハ⑫、詠⑬ハをそくとも、きうにつむるを急といふ⑭、心に急を持たるを、急の段⑮といふ也、

8 一、呂律の心⑯之事、呂と云事は、延ともいひ、静成ともいふ、たとへハ此曲ハあまたある也、りよのこゑ、りよのふし、りよの曲といふハ、平家9オのやう也、かの曲いふへきやうハ、文字をつよくいひかけて、延て曲をやわらぐるを、りよ⑰の曲といふ也、りよの声といふハ、平家のやうなるを呂のこゑといふ也、りよのふしハ、うたひにさためである也、呂角といふ事有、是ハ、延てよくいひ入ていふを、呂角といふ也、

① 般に同じ

② 般に同じ

③ 東に同じ

④ まつるか、一はう破かた(だ) ↓まつるへはう破かた

⑤ いかにも(いかに)ほとよくとも ↓いか程よく共

⑥ へたなり ↓下手のする所なり

⑦ 能 ↓但能よく

⑧ ふまざるハ ↓ふまざる者ハ

⑨ 東に同じ

⑩ 稽古を千度百度稽古する ↓稽古に

⑪ 有 ↓ありと云也

⑫ 急といふハ ↓急ハ

⑬ 詠 ↓咏うたひ

⑭ 心 ↓心持

⑮ 段 ↓位くゝ

⑯ 東に同じ

⑰ 東に同じ

呂宮と云曲あり、是は平家のこゑの様にて、する／＼と行を
呂宮と云、呂徴といふハ、する／＼と行様にて、きつといひ
延をいふ也、口伝あり^①、

律呂^②と云も呂徴心なり^③、口伝あり、可秘々々^④、

9 ①一、律といふ曲之事、律ハすぐにしてふしなし、たとへは滝
川の水のごとし、する／＼といひ下して呂に渡する^⑤を、
律の段と云^⑥、律商と云曲、すぐに云下すうちに、いひや
はらくる所あるべし、是を^⑧オ律商と云也、律羽といふ
ハ、つめて云やるをいふ也、口伝在之^⑨、

② 此律を^⑩祝言の声也、律商、さしこゑの内にあり、律◆◆
（二ハ徴）の二字を墨滅）といふハ^⑪、あけて曲を^⑫云曲にあ
り、此曲てつへきのごとし、此曲の内に、呂〔の〕曲〔二〕
似たる物也、声をあまたにつかひてをき、りよの声を持て
曲をする、◆◆（呂の）の二字を墨滅）こゑたゝすして、曲
^⑬、夢々いふへからず、声とをらす共くるしからず、先々り
よのこゑ^⑭を知るへし、呂ハうれ^⑮いのかた^⑯なり、律
ハ祝言のかた^⑰なり、

10 一、宮商角徵羽^⑱、宮ハ^⑲土用也、商〔ハ〕^⑳秋也、角ハ^㉑春
也、徴ハ^㉒夏也、羽ハ^㉓冬也、されは宮と出してハ呂ノ^㉔心
がけ^㉕、商と出しては律と心かけよ、角と出してハ、何も
心へ行、徴羽ハ呂にうつらされは、詠^㉖つまりてハろし、
口伝在之^㉗、

呂宮といふ曲有、是は平家^㉘の声のやうにて、する／＼
と行を呂宮といふ、呂徴といふハ、する／＼と行やうにて、き
つといひ延をいふ也、口伝有^㉙、

律呂^㉚といふも呂徴心あり^㉛、

口伝有、秘へし／＼^㉜

9 ①一注、律といふ曲之事、律ハすぐにしてふしなし、たとへハ滝
川の水のごとし、する／＼と^㉝いひくたして呂に渡す^㉞
を、律の段といふ^㉟、律商といふ曲、すぐにいひくたす内に、
いひやわらくる所あるへし、是を律商といふ也、律羽といふ
ハ、つめていひやるをいふ也、口伝有^㊱、

② 此律を^㊲しうげんのこゑ也、律商、さしこゑの内にあり、
律ハ徴といふハ^㊳、あけて曲^㊴いふ曲に有、この曲てつへき
のごとし、^㊵此曲のうちに、呂の曲に似たる物也、こゑ
をあまたにつかひておき、りよのこゑ^㊶を持て曲を^㊷努々い
ふへからず、こゑとをらすともくるしからず、先々りよの
こゑ^㊸をしるへし、呂ハうれひのかた^㊹なり、律ハ祝言の方
^㊺也、

10 一、宮商角徵羽^㊻、宮ハ^㊼土用也、商ハ^㊽秋也、角ハ^㊾春也、徴
ハ^㊿夏也、[㋀]オ羽ハ[㋁]冬也、されは宮と出してハ呂[㋂]心をかけ
[㋃]、商と出してハ、律と心かけよ、角といたしてハ、何も心
へ行、徴羽ハ呂にうつらされハ、詠[㋄]つまりてわろし、口伝
有[㋅]、

① 口伝あり↓ナシ

② 律呂↓但、律呂

③ 呂徴心な（あ）り↓呂徴の心也

④ 口伝あり、可秘々々↓口伝有之

注 東は改行ナシ、「二」アリ

⑤ 東に同じ

⑥ 云↓云也

⑦ 般に同じ

⑧ 此律を↓此律ハ

⑨ 東に同じ

⑩ 曲を（曲）↓ナシ

⑪ 般（墨滅前）に同じ（呂の声を

持て曲をする、呂の声たゝすし

て、曲）

⑫ りよのこゑ↓呂声

⑬ かた↓声

⑭ 宮商角徵羽↓ナシ

⑮ ハ↓ナシ

⑯ 呂ノ（呂）↓呂に

⑰ 東に同じ

⑱ 詠↓謡

⑲ 般に同じ

11 一、座敷うたひの次第の事^①、

その座しきの人数に随^{シタガウ}へし、小座敷など、又は十人はかりほどの事^②ならば、平調^③など二定て、こうたひをうたふべし、大座敷ならば、双調、黄渉などにてうたふべし、先一番の謡ハ、人の耳に入ほとに、はた^④と詠みだして、人の心をしつめさせて、次第^⑤に静に曲すべき也、その座敷の人数程、ながきうたひを□^⑥〔宋〕に近い文字〕たひて〔みなみ〕に入程うたいて〕よし、謡をさげて一ツいひ出し、後ハ^④上ていひいたすべし^⑤、口伝あり^⑥、

12 一、ふきものハ調子をとらむか為也、去程に音曲ハ、うたひ

出したる調子ヨリ、座敷にて^⑦たかくならてハ^⑦、さけてね取べし、調子さからは、あけて調子をなをす〔を〕^⑧吹〔キ〕物のハさといふ^⑨、うたひにつれてゆくハ、吹もの、道をしらするといふこと也^⑩、座敷の儀におうするを、上手といふ^⑪、

13 一、つねに人の前にて太こなど打て、打納たる時、座しき〔こ

をりて、しとろなる物也、さあらん座しきにてハ、謡数をあまた心かけて、座しきぶけうにならぬ様に、さひ^⑫うたひ出して、大この音の忘る^⑬ほど、うたふべし、大鼓、小つゝミ、座敷にてけいこある事あり、是又座敷をさます^⑭物也、大この有時の心也、但座敷に寄べし、

11 一、座敷うたひの次第^①、そのざしきの人数にしたかふへし、

小座敷など、又八十人斗ほど入事^②ならハ、平^③調などに定て、小うたひをうたふへし、大座敷ならハ、双調、わうしきなどにてうたふへし、先壱番のうたひハ、人の耳に入ほとに、はた^④と詠いたして、人の心をしつめさせて、次第^⑤に静に曲すへき也、その座敷の人数程、なかきうたひをうたひて、みな耳に入ほとうたひて^⑥よし、うたひをさけて一ツいひ出し、のちハ^④上ていひいたすへし^⑤、口伝有^⑥、

12 一、ふき物ハ調子をとらんかため也、さる程に音曲ハ、うた

ひ出したる調子より、座敷にてたかくならてハ^⑦、さけてね取へし、調子さからハ、あけて調子をなをす^⑧、ふき物のわさといふ^⑨、うたひにつれて行ハ、ふき物の道^⑩をしらするといふ事也^⑪、座敷の儀におうするを、上手といふ^⑪、

13 一、つねに人のまへにて、大こなど打てうちおさめたる時、

さしきこおりてしとろなる物也、さあらん座敷にてハ、謡数をあまた心かけて、さしき、ふけうにならぬやうに、さひ^⑫うたひ出して、大この音の忘る程^⑬ほどうたふへし、大鼓、小つゝみ、さしきにて稽古ある事有、是又座敷さむる^⑭物也、大この有時の心也、たゝし座敷によるへし、

① 般に同じ

② 般に同じ

③ はた^④と詠いたして、

④ ハ↓ナシ

⑤ いひいたすへし↓云出し候

⑥ 口伝あり↓口伝在之

⑦ ならてハ↓ならハ

⑧ なをすを↓なをすへし、是を

⑨ いふ↓云也

⑩ といふこと也↓ゆへ也

⑪ いう↓云也

⑫ さひ^⑫うたひ出して、大この音の忘る程^⑬ほどうたふへし、

⑬ 東に同じ

14 一、座敷うたひをほつと所望ありて^①、太こ、つゝミにて稽古
あらんにハ、うたふべからず、稽古過て、ついでよくハ、重
而うたふべし、

15 ①一、音曲十五之大事^②、

第一、いきつきの大事^③、^{トウ}

第二、曲之前曲、

第三、しほる曲、

第四、論儀^{ロシ}むきの曲、

第五、ゆる曲、

第六、うたひとむる曲、

第七、二^④ならひたる曲、

第八、うたの曲、

第九、次曲、^{ニオ}

第十、長いふましき曲字^⑤、

第十一、したかるく^⑥ゆふ曲、

第十二、声枕の曲、

第十三、引延曲^⑦、

第十四、枕拍子の曲、

第十五、拍子あひの曲^⑧、

①一、^⑨いきつきの曲の大事^⑩、いきつきの能、同うたひ^⑪に
てもあれ、いきつまる事あらは、うたひとむるてにハの
字を、一ツ^{トウ}すてゝいふ、又うたひとむる所の引
字あるへく候、その文字を引すして^⑫、いきをつくべし、

14 一、座敷うたひをほつと所望ありて^①、大こ、つゝミにて稽古
あらんにハ、うたふへからず、けひこ過て、つひてよくハ、
重而うたふへし、^{トウ}

15 ①一、音曲十五之大事^②、

第一、いきつきの大事^③、

第二、曲之前曲、

第三、しほる曲、

第四、ろんきむきの曲、

第五、ゆる曲、

第六、うたひとむる曲、

第七、二^④ならひたる曲、^{トウ}

第八、哥之曲、

第九、次曲、

第十、長いふましき曲字^⑤、

第十一、したかるく^⑥いふ曲、

第十二、声枕の曲、

第十三、引延曲^⑦、

第十四、枕拍子の曲、

第十五、拍子あひの曲^⑧、

①一、^⑨いきつきの曲の大事^⑩、いきつきの能、同う
たひ^⑪にてもあれ、いきつまる事あらハ、うたひとむる
てにはの字を、一ツ^{トウ}すてゝいふ、又うたひとむる所の
引字可有候、そのしを引す^⑫じて^{トウ}、いきをつくへし、

①ありて↓あるに

②大事↓大事次第

③いきつきの大事↓いきつき

④二↓ナシ

⑤曲字↓字曲

⑥かるく↓かるく

⑦曲↓ナシ

⑧拍子あひの曲↓拍子あひの曲
是なり

⑨東に同じ

⑩大事↓事

⑪いきつきの能、同うたひ↓何咏

⑫般に同じ

ほんに云、

「千代(放生川)のこゑのミいやましに、いたゞまる(つゞ)やしろ哉、

此「いやましに」の「に」の字を②ひかすしていふ、たと

へは「千代のこゑのみいやましに、いたゞきまつるやしろ

哉、

しるしをく也、15才

八嶋「爰ハ八嶋の」「うら風迄も長閑か成④、はるや⑤「ア

ころを、

浮舟「かしこき代々にありながら、なを身をうち⑥とをも

へめや、

当摩「法の庭にまじるなり、御法の庭にまじるなり、

老松「たをりやするともる梅の、はなかき⑦いさや、

野々宮「きてしもあらぬかりの世に、行かへるこそうら

みなれ⑧、

井筒「夢心、なにのをとにかさめてまし、

みもすそ「枝をならさぬ雨土の、神のいとくハありかた

や、

舟橋「とかハ十道おとし、まことの橋を渡さはや⑩、

錦木「千度百夜いたつらに、くやしきたのミ成りける

そ、

右、加様にまハして行字をまハさで云を、いきつきの曲と

云也、何も⑪此心得たるへき也、

ほんに云、

「千代(放生川)の声のミいやましに、いたゞきまつる①やしろか

な、

此「いやましに」の「に」の字を②ひかすしていふ、たと

へハ「千代の声のミいやましに、いたゞきまつるやしろか

な、

十しるしおく也、

八嶋「爰ハ八嶋の」「うら風までもと成④、はるや⑤心

浮舟「かしこき代々にありながら、なを身をうち⑥とおも

へめや、

当摩「法の庭にまじるなり、御法の庭にまじるなり、

老松「たほりやするともる梅の、花かぎ⑦いさや、

野々宮「きてしもあらぬかりの世に、行かへるこそうら

みなれ⑧、

井筒「夢心、なにの音にかさめてまし、

みもすそ「枝をならさぬ雨土の、神のいとくハありかた

や、

船橋「とかハ十道おとし、まことの橋を渡さはや⑩、

錦木「千度百夜いたづらに、くやしきたのミ成けるぞ、

そ、

右、かやうにまハして行字をまハさしていふを、いきつ

きの曲と云也、いれも⑪此可為心得也、

①東に同じ

②を↓ナシ

③ハ↓を

④般・拾は「な」に直ゴマと引き、東も同じか(東・拾図版参照)

⑤般・東は「や」にノミ。拾は「春」にノミ、「ア」ナシ(東・拾図版参照)

⑥うち↓うし

⑦般に同じ

⑧うらみなれ↓うらみなれ

⑨十↓十の

⑩渡さはや↓渡さはや

⑪般に同じ

②一、第二、曲前の曲、此曲ハ①、いかにもく／＼かろくして、

うきやかに、をうきに②いひ出して、曲のところをいひや
はらくるを、曲の前の曲と云、大きにいひかくるを曲とい
ふ、延ていひやハらけ呂になるをハ曲とはいはず、18才
大きにいふを、曲のまへの曲と云也、此謳にて能々するな
り、

上宮 大子「松風夢を破て、こかう③の天も」、

鳴廻「床の山」「つゝめども」「よ川の水のすゑかとよ」、

蘓武「たのものかりも人なれて、人きんをもさらざりけれ

ハ」「きいの思ひ④なし」、

とうたいき「水のうへのあハ」「多ひくハ⑤春の花、きのふ

ハ」、

よろほし「まこと成かや⑥、末世さうわうの御誓⑦」、

しゆんくはん「此嶋の鳥獣も、なくハわれを」、

利妹人⑧「ついに御門にみえたまハすして」、

「りふしんハもとハ是」、13才

礎「その夢ハやふりそ、くしく々後ハ」「月ハかり風

のけき⑨」「うらめしかりける、いんくハのまうしう」

「あらうてなや⑩そら事や、かゝる人のこゝろか」注、

かるかや「それ人間の別ハ、又いつの代にか⑪あふへき」

「まうさう⑫てんたう、夢まほろしの世の中に」、

②一、第二、曲前之曲ハ①、いかにもく／＼かろくして、うきや

かに、おうきに②いひ出して、曲のところをいひやわらく
るを、曲の前の曲といふ、大きにいひかくるを曲といふ、
延ていひやわらけ呂になるをハ曲とハいはず、大きにい
ふを、曲のまへの曲といふ也、この謡 ウタにてよく／＼
する也、

上宮 太子「松かせ夢を破てこがう③の天も」、

鳴廻「床の山」「つゝめども」「よ川の水のすゑかとよ」、

蘓武「たのものかりも人なれて、人きんをもさらざりけれ

バ」「きいのおもひ④なし」、

とうたいき「水のうへのあハ」「多ひくわ⑤春の花、きの

ふハ」、

よろほし「まことなるかなや⑥、末世さうわうの御ちかひ⑦」、

しゆんくわん「此嶋の鳥獣も、なくハわれを」、18才

りふじん⑧「ついに御門にみえたまハすして」「りふじん

ハもとハこれ」、

きぬた「その夢ハやふりそ、くしく々後ハ」「月ハかり風

のけき⑨」「うらめしかりける、いんぐわのまうし

う」「あらうてなや⑩そら事や、かゝる人の心

か」注、

かるかや「それ人間のわかれハ、又いつの代にか⑪あふへき」

「まうさう⑫てんたう、夢まほろしの世の中に」、

① 般に同じ

② を（ち）うきに↓大きに

③ こか（が）う↓五更

④ 思ひ↓思ひを

⑤ 多ひくハ（わ）↓多いくハ

⑥ 東に同じ

⑦ 誓↓撰

⑧ りふじん↓花かたみ

⑨ のけき↓のとけき

⑩ うてなや↓うつつなや

注 ⑨⑩以外は拾も同文

⑪ か↓ナシ

⑫ 東に同じ

墨染桜「右近^①の桜にいたるまで、此はな^②」「鳥のおひて
かへるときハ^③」、

哥うら「きゆる物ハ」「二度」「しよさたざひなり、しは
ひへく」、

きん菊^④「頭北面西うけふくハ」「二万ぎひのはじめより、
此ところの主たれと、老翁いまた」、^{14才}

初瀬六代「つるぎをもおとして^⑤、我子を」、^{ハッセ}

江口「さきの世のむくひまで、おもひやるこそ」、

ゆら物狂「夕へのさかひのかねを」「ま事に、ごんげんの
ちかひかや」、^{やうきうとも云}

おきの院「あまのこほりかりたの郷ど（このあと「言所に」
と書くも貼紙で抹消）」「いまハとまやの」「さらで
だに、かなしかるへき」、

たかむら「此たび君のため、けきしんありしか^⑦ともか
らを^⑧、さんさんにねまてもなく^注」、^{（ママ）}

より風「佐賀野々はらの女郎花、なにめてし」、

まつら物狂^⑨「シヤ」「」のかたへ行舟の、たよりをまつ
へき「舟の^⑩せんとうなり」「心え手合^⑪」、^{（ママ）}

鶺鴒「今ハせんひをくゆるとも^⑫、かいも^{14才}」、^{（ママ）}

橋立「はてし所を訪ぬれども」、

ありとをし「たて雲^⑬すきにみれば」「月けの此駒を引立
みればふしきやな^⑭」、^{（ママ）}

墨染桜「左近^①の桜にいたるまで、此はな^②」「鳥のおひて
かへるときハ^③」、

哥うら「きゆる物ハ二度」「しよさたざひ也、しはらく」、
^{18才}

きん菊^④「頭北面西うけふくわ」「二万ぎひのはじめより、
此ところの主たれと、老翁いまた」、

はつせ六代「つるぎをもおとして^⑤、我子を」、^{ハッセ}

江口「さきの世のむくひまで、おもひやるこそ」、

ゆら物狂「ゆふへのさかひのかねを」「まことに、ごん
げんのちかひかや」、^{やうきうとも云}

おきの院「あまのこほり、かりたのがうと」「いまハ、と
まやの」「さらでだに、かなしかるべき」、

たかむら「このたびきみのため、けきしんありし^⑦とも
からを^⑧、さんく^{（ママ）}にねまてもなく^注」、^{（ママ）}
^{19才}

①東に同じ。
②はな↓かな
③ときハ↓とき

④きん菊↓白鬚

⑤おとして↓おらして

⑥やうきうとも□（シ）↓ナシ

⑦東に同じ

⑧ともからを↓ともから共から
を（衍力）

注 拾も同文（さんく^{（ママ）}にねまて
もなく）

⑨まつら物狂↓松浦物語

⑩東に同じ

⑪心え手合↓心得て手をあハせ

⑫東に同じ。但し拾は「かいも」
の「か」に「大延」の節付

⑬東に同じ

⑭般に同じ

百万「なきあとの涙こそ」「嵐のかせ松の尾」、

清経「かやうに聞えしかば、新中納言とあへず^①」、

右之^②前之曲之心得^③、此謡の覚悟「ニテ」可在之^④、

③一、^⑤しほる曲ノ^⑥、たとへハしほる曲と云ハ、是をくる

ともいふ也、先しほるといふハ、たちこゑ成も、音をひ

しきてたゝぬ^⑦やうにして、いかにもしほり入たるを、

しほると云て、面白曲也、くる^⑧といふハ、そらへ

矢をくりあくることくに云上ルを、くると言也^⑨、しほ

る曲とくる曲^⑩とハ、をなし物のかはれるもの也、しほ

る曲、くる曲、いつれにてもくる曲といふ心、しほる曲と

言曲、此うたひ「の」心ありと云也^⑩、

しほる曲にいふ「はな^(大原御寺)かたみひちにかけさせたまへる^⑪

ハ女院にてハ^(む)たらせさふらふ^⑫」、

松風「あしへの、田鶴こそハたちさハけ、四方の」、

「なだの、しほくむうき身そと」、

住田川「わかおもひ子ハ東路に、あるやなしやと、とへと

も〜」「しやうじぢやうやの月^⑬影」「南無

阿弥陀仏〜」、

松浦物狂「その時、水主かんどりとも、しゆん風にほをあ

けて、

浮船「川よりをちの夕けふり」「道ハ、まよハず」「なげき

し末ハ」「あふささきるさの^⑭」「小嶋の色ハ」、

百万「なき跡のなミたこそ」「嵐のかせ松の尾」、

清経「かやうに聞へしかバ新中納言とりあへず^①」、

右之^②曲之前之曲之心得^③、此謡の覚悟^④にて可有之^④

③一、第三^⑤、しほる曲^⑥、たとへハしほる曲と云ハ、是をく

るともいふ也、先しほると云ハ、たちこゑなりとも、音を

ひしきてたゝぬ^⑦やうにして、いかにもしほり入たるを

しほるといひて面白曲也、くるといふハ、そらへ矢をくり

あくることくにいひあくるを、くる曲といふ^⑧、^⑧しほ

る曲とくる曲^⑩とハ、おなし物のかはれる物也、しほる曲、

くる曲、いつれにてもくる曲といふ心、しほる曲と云曲、

此うたひの心に有と云也^⑩、

しほる曲にいふ「はな^(大原御寺)かたミひちにかけさせたまへる^⑪

ハ女院にてわたらせさふら^(む)」、

松風「あしへの、たづこそハたちさわげ、四方の」、

「なだの、しほくむうき身そと」、

住田川「わかおもひ子ハあづまぢに、ありやなしやと、と

へども〜」「しやうじぢやうやの月^⑬影」「なむ

あミた仏〜」、

松浦物狂「其時、水主かんどりども、しゆん風にほをあ

けて、

浮舟「川よりおちのゆふけふり」「道ハ、まよハず」「なげ

きし末ハ」「あふささきるさの^⑭」「小嶋の色ハ」、

① 東に同じ

② 之↓ナシ

③ (曲之 前之曲之心持 (得 ↓

曲之前之曲之心持

④ 「ニテ」可在之↓あるへし

⑤ 東に同じ

⑥ 東に同じ

⑦ たゝぬ↓たえぬ

⑧ 東に同じ

⑨ とくる曲↓ナシ

⑩ 心 (に) ありと云也↓心に有と

なり

⑪ たまへる↓給ふ

⑫ 般に同じ

⑬ 月↓月の

⑭ 南無阿弥陀仏〜〜↓南無

阿弥陀仏〜

⑮ の↓ナシ

しほる^①曲の心得^②也、くる曲と云曲ハ、

静^③「しつやしつ、しつのをたまきくり返し」、

百万「げにやをもんみれハ何国とてもすめは」「さかり、

過行山さくら」、

通小町「おもきかうへのさよ衣」「月ハ待らん月をハ待ら

ん、我をはまたし、そら事や」、^{16才}

当麻「じひかゆふ」、如此^③の心にてくり上ル也、

④一、「第四」、ろんぎむきの曲之事、論儀に二人してうたふ

事あり、同音のうた^④をうたふものハ、するくくとつよ

くうたふべし、うけ取かたハ呂にうけ取べし、論儀に呂

律^⑤ある也、同音の^⑥方ハ、曲をうたふと心へ、つよくい

ひかけて、請取方も呂にゆうくとうけとらすべし、う

けとる方ニ、あかた「な」はまやらわの文字、人のも

しも文字^⑦あらは、それにて曲をすべし、たけくらべの

所あらは、前のくをつよく^{16才}いひわたして、後の句

を呂に云、たうき世の曲といふハ、すミの口をれすし

て、をしなくりて行、いゝ出す文字^⑧「ツ」ヨク「いゝい

ださせて、次第^⑨文字より」やハらくる事なきを、をし

なくなる謡^{ウタイ}といふ^⑩、又人のハろきをうときと^⑪そだ

てゝ、わがめひよをせよ、ハろき^⑫をそしり、よきをそ

ねめは^⑬、我一人上手にて候といハぬハかりにて、人お

かしき物也、人をそだつれば、我か上ニ成る也、

しほる^①曲の心得^②也、くる曲といふ曲ハ、

静^③「しづやしづ、しづのおだまきくりかへし」、

百万「げにやおもんミれバいづくとてもすめバ」「さかり、

過行山さくら」、

通小町「おもきがうへのさよ衣」「月ハまつらん月をバ待

らん、我をハまたじ、そらことや」、^{21才}

当摩「じひかゆふ」、如此^③の心にてくりあぐる也、

④一、第四、ろんぎむきの曲の事、ろんきに二人してうたふ事

有、同音のうた^④をうたふ者ハ、するくくとつよくうたふ

へし、うけ取かたハ呂に請取へし、ろんきに律呂^⑤ある也、

同音の^⑥方ハ、曲をうたふと心へ、つよくいひかけて、請

取かたも呂にゆうくくと^{16才}うけとらすへし、うけ取方

に、あかたなはまやらわの文字、人のもしも文字^⑦あら

ハ、それにて曲をすへし、たけくらへの所あらハ、前のく

をつよくいひわたして、後の句を呂にいふ、たうき世の

曲といふハ、すミの口おれすして、おしなくりて行、いゝ

出す文字を^⑧つよくいゝいたさせて、次^⑨文字よりやわ

らくる事なきを、おしなくなる謡^{ウタイ}といふ^⑩、又人のわろきを

うときと^⑪そたてゝ、わかめひよをせよ、わろき^⑫をそし

り、よきをそねハ^⑬、われ一人上手にて候といハぬハかり

にて、人おかしき物也、人をそたつれば、わかうへに成也、

①しほる↓右、しほる

②心得↓心持

③静↓二人静

③如此↓右かくのことく

④うた↓かた

⑤東に同じ

⑥の↓ナシ

⑦人のもしも文字↓ナシ

⑧東に同じ

⑨次第(次) ↓次の

⑩いふ↓云也

⑪と↓を

⑫ハ(わ)ろき↓悪き

⑬般に同じ

恋重荷「よしとても、^{小延}、此ミハかるしいたづらに、

恋のやつこと我なりて注、

もとめ塚「はるの野に、^{小延}、すみれつみにとうし人^②

の、イオ」

小原御幸「爰とてや、^大、けにしやつくハウのしつ

かなる」、

常陸帯「よしとてもけふ^④ヨリハ、人も我もむつひ月の」、

とくさ「とくさかる、^{少延}、その^⑤あさぎぬ袖ぬれて

みかゝぬ露の玉そちる」、

論儀のうちに下返す所あらは、前大きにいゝかけて、後

ハ延てそといふヲ、論儀むき^⑥の曲といふ、口伝あり、

曲ハつよきによハきをそへて、たとへは、すゝきの風に

随ふ^⑦ことし、

⑤一、第五、ゆる曲といふ事、ゆる曲ハ、うゑヨリあら

ゝとゆり下して、次第にいひつめて、はしのきさめ^⑧

をるゝことくにいふべきユウなり、たゞあて所^⑨なくしてハ、

はてはなし、返々、きざき橋を渡やうに^⑩

相生「南枝花初て開」、是ハ「う」の字ヨリつめて云なり、

一、佐保山「みなれいげんの神所たり」、是ハ「い」の字

にてつむる也、

一、知明「くれないなびくはたのあし、ちりゝに成けし

恋おも荷「よしとても、^{小延}、此ミハかるしいたづらに

恋のやつこと我なりて注、^{23ウ}

もとめ塚「はるの野に、^{少延}、すみれつみにとうし人^②の、

小原御幸「爰とてや、^{少延}、けにしやつくわうのしづか

なる」、

ひたち帯「よしとてもけふ^④よりは、人も我もむつひ月の」、

とくさ「とくさかる、^{少延}、きその^⑤あさぎぬ袖ぬれて、

みがゝぬ露の玉そちる」、

ろんきのうちに下返す所あらハ、前大きにいゝかけて、

後ハ延てそと云を、ろんきむき^⑥の曲といふ、口伝有、

お曲ハつよきによわきをそへて、たとへハ、すゝきの

風にしたかふか^⑦ことし、

⑤一、第五、ゆる曲といふ事、ゆる曲ハ、うゑヨリあら

ゝとゆりくたして、次第にいひつめて、はしのきさめ

の^⑧おるゝことくにいふべき也、たゞあて所^⑨なくして

ハ、はてはなし、返々きざき橋をわたるやうに^⑩、^{23ウ}

相生「南枝花初て開」、

是ハ「う」の字よりつめていふ也、

佐保山「みなれいげんの神所たり」、

是ハ「い」の字にてつむる也、

知明「くれないなびくはたのあし、ちりゝになるけ

注 拾も同文（恋のやつこと我な

りて）

① 般に同じ

② うし（ら）人↓こし人

③ 拾は「小延」の節付アリ

④ けふ↓けふり

⑤ 東に同じ

⑥ 論儀むき↓論義

⑦ 東に同じ

⑧ 東に同じ

⑨ 所↓所も

⑩ 渡やうに↓わたるやうに心得

ゝし

⑪ 般・東・拾共、ユリの節付が「に

に一個、「て」に二個。但し般・

東はへの字型（東・拾図版参照）

「に一個、「て」に二個。但し般・東はへの字型（東・拾図版参照）

是ハ「多」①の字にてつむる也②、

一、八嶋「しゆらたうの有口ま御らんせよ」^{注1}、是ハ「を」^③の字にてつむる也、

一、百万「この世ハそもいづくのほとそや」、是ハ「あ」^④の字にてつむる也、^{18キ}

右、此五番のゆりとむる所の文字の心ニテ、いづれもゆりとむる也、

一、采女「月になけ、をなし雲井のほときす、天津アマノハヤヒそら^⑤ねのよろつ代までに」、是ハ又口伝^⑥、

⑥ 一、第六、謳とむる曲之事、うたひをうたひ出す所、序にてうたひ出さは序にてとめ、破にてうたひ出したる^⑦謡をハ破にてとめたるを、音曲の大事ニ仕也^⑧、是をうたひのくつかふりと云て、たしなむ事也、いかにもくくうつくしく、うたい出して、やはらかにうたひとむるものなり、たとひ^⑨破のうたひにて「ウ」ありとも、少静にして、序の心にうたいとむるを能と云也、

⑦ 一、第七、曲二ならひたる所之曲之事、をなし文字、二も三もならひてある所あり、何れも心のかかりあるべし
籠太鼓「恋と云事もうら^{大中}シと云事も、なきならひなら^延ば、

此「いふ事」の「も」の字、ハしめの「も」字^⑩をハ

是ハ「し」①の字にてつむる也②

八嶋「しゆらだうの有様御覽ぜよ」^{注1}、是ハ「せ」^③の字にてつむるなり、

百万「この世ハそもいづくの程ぞや」にてつむる也^④、

右、此五番のゆりとむる所の文字の心にて、いづれもゆりとむる也、^{24キ}

采女「月になけ、おなじ雲井の郭公、あまつ空^⑤ねのよろづよまでに」是ハ又口伝有^⑥、

⑥ 一、第六、謳とむる曲之事、うたひをうたひ出す所、序にてうたひ出さは序にてとめ、破にてうたひ出したる^⑦謡をハ破にてとめたるを、音曲之大事にするなり^⑧、是をうたひのくつかふりといひて、たしなむ事也、いかにもくくうつくしくうたひ出して、やわらかにうたひ留る物也、たとひ^⑨破のうたひにてありとも、少静にして序の心にうたひ留るを能と云也、

⑦ 一、第七、曲二ならひたる所之曲之事、おなし文字、二も三もならひてある所有、いづれも心のかかりある^{大中}「オ」へし、
籠太鼓「恋といふ事もうら^{大中}シと云事も、なきならひなら^延ば、

此「いふ事」の「も」の字、ハしめの「も」字^⑩をハ

① 般に同じ

② 般に同じ

注1 拾も同文（御覽せよ）

③ 般に同じ

④ 般に同じ

⑤ ユリの節付が、般は「天」に二個、「そ」に一個、東は「ま」「つ」「空」に各一個、拾は「あ」「ま」「つ」に各一個。但し般・東はハの字型。拾には「ア」の補筆ナシ（東・拾図版参照）

⑥ 口伝（口伝有） ↓ 口伝在之

⑦ 出したる ↓ 出したらん

⑧ 東に同じ

⑨ たとひ ↓ ナシ

注2 波線部を朱線で消した後、丸で括ってイキとする

⑩ 「も」字 ↓ 「も」の字

中音にいゝて、後の「も」の字を引下ていふべし、「なきならひ^①ならは」の「な」の字三ツ^②あり、始の「な」の字をハ大二いひて、中の「な」の字を中音に延て、商の曲にていゝて、とむ^③「な」の[㍻]字を呂にていふを、曲二ならいたる曲の大事といふ、いつれにとりても、おなし心也、次第^④にいゝやハラぐる也、用べし、

野々みや、是ハ二柱の曲と云事、大事也、「もりの^引⑤木の^延間のゆふつくよ、かけかすかなる木の^{引下}⑥の、くろ^延きの鳥[㍻]居[㍻]の^大⑦二柱に、立かくれてうせにけり、あとたちかくれうせにけり、「二柱」の所にて俄にいへは、たひ^〱に曲かはりてハろし^⑧、「森の」^〱文字ヨリふしかはりて、「此ま」の「の」^〱字、「この下」の「の」^〱字、「くろ木」の「^〱」字、「鳥居」の「^〱」字、此五^〱の^下てにの「^〱」字うち^⑩、心[㍻]かけて別々にいへハ、

をのつから二柱ハいハる^〱也、たとへハ大事の関をとるに、くハ^{通書}しよを取たることく、「二柱」の所をする^〱ととをるやうに心かくる也、曲口伝あり^⑪、

三井寺「先初夜の鐘をつく時ハ」「後夜の鐘をつく時ハ」
「じぢやうの[㍻]ひ^下きハ」「入相ハ」、此四の「わ」^⑬の字いつれも曲有、別々の曲有、如此曲ハちがい有、是ハ

中音にいゝて、後の「も」の字を引下ていふへし、「なきならひの^引①ならハ」の「な」の字、三^②有、始の「な」の字をハ大にいひて、中の「な」の字を中音に延て、商の曲にていひて、とむ^③「な」の[㍻]字を呂にていふを、曲二ならひたる曲の大事といふ、いつれにとりても、おなし心なり、次第^④にいひやわらくる也、用へし、

野々宮、是ハ二柱の曲といふ事、大事也、「もりの^引⑤木の^延間のゆふつくよ、影かすかなる木の^{引下}⑥の、くろ木[㍻]の^大⑦居[㍻]の^大⑦二柱に、たちかくれてうせにけり、あとたちかくれ失にけり、「㍻」
「二柱」の所にて俄にいへハ、たひ^〱に曲かはりてわろし^⑧、「森の」^〱文字ヨリふしかはりて、「この間」の「^〱」字、「この下」の「の」^〱字、「くろ木」の「^〱」字、「鳥居」の「^〱」字、^〱の^五の^下てにはの「^〱」字より^⑩心かけて別々にいへハ、おのつから二柱ハいハる^〱也、たとへハ大事の関をとるに、くハ^{通書}しよを取たることく「二柱」[㍻]の^〱所をする^〱ととをるやうに心かくる也、曲口伝有^⑪、

三井寺「先初夜のかねをつく時ハ」「後夜のかねをつく時ハ」
「じぢやうの[㍻]ひ^下きハ」「いりあひハ」、此四の「わ」^⑬の字いつれも曲有、別々の曲有、如此曲はち

「わ」^⑬の字いつれも曲有、別々の曲有、如此曲はち

① 般に同じ

② 東に同じ

③ とむ↓とむる

④ 也↓事を

⑤ 東・拾直ゴマ（般は虫損により形状不明）に「引」。

⑥ 般・東・拾直ゴマに「引」。拾は「下」の節付ナシ

⑦ 般・東・拾「の」にユリ型の博士。拾は「鳥」に傍記ナシ

⑧ 般・拾直ゴマ。東は上ゲゴマ（以上東・拾図版参照）

⑨ ハ（わ）ろし↓悪し^{あし}

⑩ 東に同じ

⑪ 曲口伝あり↓曲口伝在之

⑫ じぢやうの↓しんてうの

⑬ 「わ」↓「ハ」

口伝して、音曲うまき様にうたふをしやうすといふ、但、余に〜うまからするハわろし、只うたひハ、ぶさいにて
①「ミつ〜と有を②よきと云也、

⑧一、第八、哥の曲③、是ハ哥のひかうににたるを哥の曲
③とす、然共、ひかうににてにさる物といふ、ひかう
なれは無曲（以下、この項内は改行なし）

西行桜「花見にと、むれつ〜④人の来るのミカ⑤、あたら
桜のとかにハありける」曲ハ口伝に有⑥

きよつね「世の中の、うさにハ神もなき物を、何いのるら
ん心つくしに」⑦「さりともと、おもふ心も虫の音
も、よはりはてぬる秋の暮かな」

江口「秋の水、みなきりおちてさる舟の⑦、月も影さす」
住田河「聞や如何、うはの空成風たにも、松に音する習あ
り」

熊野「老ぬれは、さらぬわかれのありといへハ、弥々見ま
くほしき君哉」「如何せん、都の春もおしけれと、な
れしあつ⑧ウまの花やちるらん」

杜若「から衣、きつ〜なれにしつましあれば、はる〜き
ぬる旅おしそおもふ」

此哥の⑧心「成」⑨を哥曲⑩といふ也、曲ハ口伝に有⑪、

⑨一、第九、次曲といふ事ハ、此曲ハ細々なき曲也、但、人珍
敷曲をいひかくるに⑫、大にいひかけは、ちいさくほそ

がひあり、是ハ口伝して、音曲うまき様にうたふを③オ
上手といふ、但、余に〜うまからするハわろし、た〜う
たひハ、ぶさいにて④「ミつ〜とあるを⑤よきといふ也、

⑧一、第八、哥之曲③、是ハ哥のひかうににたるを哥の曲とす、
然共、ひかうににてにさる物といふ、ひかうなれハ無曲、
西行桜「花ミにと、むれて④人のくるのミぞ⑤、あたら桜の
とかにハありける」⑧ウ曲ハ口伝に有⑥、

きよつね「世の中の、うさにハ神もなき物を、何いのるら
ん心つくしに」⑦「さりともと、おもふ心もむしの音
も、よはりはてぬる秋の暮哉」、

江口「秋の水、みなきり落てさる舟の⑦、月も影さす」、
すミ田川「きくやいかに、うはの空なる⑧オかせだにも、
松に音するならひあり」、

熊野「老ぬれバ、さらぬ別のありといへバ、いよ〜みま
くほしき君哉」「いかにせん、ミヤこの春もおしけれ
ド、なれしあづまの花やちるらん」、

杜若「から衣きつ〜なれにしつましあれば、はる〜きぬ
るたびをし⑧ウぞおもふ」

此哥⑧心成⑨を哥の曲⑩と云也、曲は口伝に有⑪、

⑨一、第九、次曲といふ事ハ、此曲ハ細々なき曲也、但、人
珍敷曲をいひかくると⑫、大にいひかけは、ちいさくほそ

①ぶ（ふ）さいにて↓ナシ

②を↓ナシ

③曲↓曲ハ

④般に同じ

⑤東に同じ

⑥口伝に有↓口伝在之

⑦拾は「ユ」「延」の節付ナシ

⑧此哥の↓右此哥の

⑨心「成」↓心

⑩東に同じ

⑪口伝に有↓口伝在之

⑫般に同じ

くいふへし、ほそく延ていひかけは、大にいふへき也、
 是ハ一人音曲ニハなし、一人うたいにいふハ、たゞみたる
 曲にてわろし、但「二」人してもいゝたくハ、一字大に、
 一句ほそく延て云へし、

⑩一、第十、長いふましき字の曲^①、村雨の「め」のぢ、さゝ
 めことの「め」の字、うねめの「め」のぢ、しのゝめの「め」
 のぢ、こさめの「め」のぢ、春雨の「め」のぢ、あやめの
 「め」^{ヲオ}の「め」^新のぢ、いとめの「め」のぢ、おとめの
 「め」のぢ、さこめ^②の「め」のぢ、此たぐひの「め」の字、
 あしへの「」の字、しへの「」のぢ、よるへの「」の
 のぢ、春への「」のぢ、さわへの「」のぢ、^④ 岡辺^⑤
 の「」のぢ、野への「」のぢ、^⑥ 井筒の「」のぢ、あ
 きつすの「」のぢ、つらき物の「」のぢ、ついの「」
 のぢ、松虫の「」のぢ、つりりさせの「」のぢ、きつ
 ねの「」のぢ、つきのふの「」のぢ、たゞのぶの「」
 のぢ、しのふの「」のぢ、しやうふの「」のぢ、せう
 ふの「ふ」のぢ、此たぐひのぢをはかるく、そといふ字に
 あたれはわろし、しあんしていふへし、

⑪一、第十一、したかるくいふ曲の事、こゝに、かるきといふ
 をはやきといふ事、にたる物也、かるきハよし、はやきハ
 わろし、静成ハよし、したるきハわろし、如此心得^{ヲウ}

くいふへし、ほそく延ていひかけハ、大にいふへき也、
 是ハ一人音曲にハなし、一人うたひに云ハ^{ヲオ}、たゞみた
 る曲にてわろし、但一人してもいひたくハ、一字大に、一
 句ほそく延て云へし、

⑩一、第十、長いふましき字の曲^①、村雨の「め」の字、さゝ
 めことの「め」の字、うねめの「め」の字、しのゝめの「め」
 の字、こさめの「め」の字、春さめの「め」の字、あやめ
 の「め」の字、いとめの「め」の字^{ヲウ}乙女の「め」の
 字、さこめ^②の「め」の字、此たぐひの「め」の字、あし
 への「」の字、しへの「」^③の字、よるへの「」の
 字、春への「」の字、さわへの「」の字、いそへの「」
 の字、わたなへの「」の字^④、岡への「」の字、野へ
 の「」の字^⑥、井つへの「」の字、あきつすの「」
 の字、つらき物の「」の字^{ヲウ}つゐの「」の字、松
 むしの「」の字、つりりさせの「」の字、きつねの「」
 の字、つきのふの「」の字、たゞのふの「」の字、し
 のふの「ふ」の字、しやうふの「ふ」の字、せうふの「ふ」
 の字、此たぐひの字をハ、かるク、そとゆふ字にあたれハ
 わろし、しあんしていふへし、

⑪一、第十一、したかるくいふ曲の事、^{ヲウ}爰に、かるきと
 いふをはやきといふ事、にたる物也、かるきハ吉、はや
 きハわろし、静なるハよし、したるきハわろし、如此

①曲↓曲の事

②さこめ↓さくめ

③しへ↓しるへ

④東に同じ。(傍線部が入る)

⑤岡辺↓岡のへ

⑥野への「」のぢ(字↓ナシ)

てかろくいふやう、縦タトヘば、したをよくかへして、字をみじかく、したのさきにて字をあつかいていへは、したかるき曲に成、謳アトカ注ハ静に文字をはやくいふへし、文字のわけもなく、字にもあたらて、さためなきやうにうたへハ、したるき^①なり、

⑫一、第十二、音枕の曲といふハ、声枕と云^②ハ、声を出すと、謡の出る所の声をいからかして、人のみゝにつぶさに入、さて曲の所をいひやわらぐる^③べし、曲の前の曲の心より、つよミを入れていひ出すを、声の枕といふ也、但たひくゝにあるへからす、座敷一度に三度あるへし、

⑬一、第十三、引延曲といふ事、是第一諷の病なり、大事也、長引延ハ、謳むじやうのさんを引ことく也、ゆめくゝうたひの曲の内に有へからす^④、只引と云ハ、字一ぢにつよオおくあたり^⑤、延所をやわらけてウタイ謳を呂リヨの曲と云も、此曲の心也、「馬よりおちてなかめける、さかのゝ原の女郎花、なにめでゝおれるはかりのなさけ哉」といふ、「はらの女郎花」の「の」の「」字の所^⑥を、「の」おひけは、おつかくる「を」の字をいふ心成へし、口伝有^⑦、

⑭一、第十四、枕拍子の曲の事、うたいに、いひにくき所あらは、其時つらをふり合せ^⑧、枕拍子といふ、かなわさる

心得て、かろくいふやう、縦は、したをよくかへして、字をみじかく、したのさきにて字をあつかひていへハ、したかるき曲に成、謡ハ静に文字をはやくいふへし、オ文字のわけもなく、字にもあたらて、さためなきやうにうたへハ、したるき^①也、

⑫一、第十二、音枕の曲と云ハ、声枕といふ^②ハ、こゑを出すと、謡の出る所のこゑをいからかして、人の耳につぶさに入、さて曲の所をいひやわらくる^③へし、曲の前の曲の心より、つよオミを入れていひ出すを、こゑの枕といふ也、但たひくゝにあるへからす、座敷一座に三度あるへし、

⑬一、第十三、引延曲といふ事、是第一うたひのやまひ也、大事也、長引延ハ、謡むじやうのさんをひくことく也、努々うたひの曲の内に不可有候^④、たゝ引といふハ、字一ぢにつよオおくあたりて^⑤、延所をやわらけて謳を呂の曲といふも、此曲の心也、「馬よりおちてなかめける、さかのゝはらの女郎花、なにめでゝおれるはかりのなさけ哉」といふ「はらのおミなへし」の「」字所^⑥を、「の」をひけハ、おつかくる「を」の字をいふ心成へし、口伝に有^⑦、オ

⑭一、第十四、枕拍子之曲事、うたひに、いひにくき所あらハ、其時つらをふり合せ^⑧、枕拍子といふ、かなわさる所にて

注 親本の書体が「跡」に似ていたか

①したるき↓したかるき

②と云↓ナシ

③やわらぐる↓和く

④有へからす（不可有候）↓

不可在之候
これあるへからす

⑤東に同じ

⑥般に同じ（「の」の字の所を）

⑦口伝（に）有↓口伝有之

⑧合せ↓合を

所にてハ、まなこをふさきてつらをふるへし、是ハしやうとく^①になつとくする也、

⑮一、第十五、拍子あひの曲と云事、是をうけおしの曲とも云、

拍子をよくうけて、うたいの句を待也、まぢかねて^②いひ出すハ、拍子にはつれねども、是ハ拍子はずれといひて、ひけふ^③也といふ、音曲者のちしよく^④也、おそくして^⑤ほどにあふハよし、拍子をまたす、句をうけすして程に^ㄱいらさるハ、稽古のうすきはしめなり、程ハ拍子のあいなり、ほどをわするへからず、縦つゝみにうち切所なくとも、いきつまらハ、句の所の前の字を程にて引きらは、句のあいをうちきらてかなふへからず、其時ほどにていひ出すへし、但これハしよ心なる者之事也、其道をしりたらんハ、たかひにほねおる事^⑥なし、たすけ合^⑦へし、専一候^⑧、拍子相の曲の能ハゆや也、此諷にあり、吾^⑨、此十五之大事^⑩こして音曲「の」秘事是也^⑪、

16 一、座布にて諷時、調子、双調をわうしきの様にきこえ^⑫、平調ハそうてうに人のきく様にうたふへし、

17 一、謳^{うた}をうたふに、むかいたる所にくぎをうちて、いとをはりてひくかことくに謡へし、つよくひけはいときるゝ、^ㄱよはくひけはたるみ有、きれすたるますして、ゆたかに成やうに用へし、

ハ、まなこをふさきてつらをふるへし、是ハしやうとく^①になつとくする也、

⑮一、第十五、拍子あひの曲といふ事、是をうけをし曲ともいふ、拍子^ㄱをよくうけて、うたいの句を待也、

まぢかねて^②いひ出すハ、拍子にはつれねども、是ハ拍子はずれといひて、ひけふ^③也といふ、音曲者のちぢやく^④也、多して^⑤ほどにあふハ吉、拍子をまたす、句をうけすして程にいらさるハ、稽古のうすきはしめ也、程ハ拍子のあひ也、^ㄱほどをわするへからず、縦つゝみにうちきる所なくとも、いきつまらハ、句の所の前の字を程にて引きらハ、句のあひをうちきらてかなふへからず、その時程にていひ出すへし、但是ハしよ心なる者之事也、其道をしりたらんハ、たかひにつ^ㄱねをる事^⑥なし、たすけ^ㄱ合^⑦へし、専一候^⑧、拍子あひの曲の能ハゆや也、此うたひにあり、右^⑨、此十五の大事に^⑩こして音曲の秘事是也^⑪、

16 一、座敷にてうたふ時、調子、双調をわうしきの様にきこ^ㄱへ、平調はそうてうに人のきくやうにうたふへし^ㄱ、

17 一、謳^{うた}をうたふに、むかひたる所に釘をうちて、いとをはりてひくかことくに謡へし、つよくひけハ糸きるゝ、よはくひけハたるミ有、きれすたるますして、ゆたかになるやうに用へし、

① 東に同じ

② まぢかねて ↓ かねて

③ ひけふ ↓ 比興「非興」の意か

④ ちしよく (ちぢやく) ↓ 恥辱

⑤ 般に同じ

⑥ ほ (つ) ねおる事 ↓ 骨たる事

⑦ 合 ↓ 合す

⑧ 候 ↓ 也

⑨ 東に同じ

⑩ 東に同じ

⑪ 秘事是也 ↓ 秘事なし

⑫ 般に同じ

18 一、謳にふしつくるはかせの次第^①

下 上当 スク也 ヒク ユリトムル スクニヒキ下
ハルトモ云

ヨセ下 ツク シラル ヒロヲ^②

ア ア イ イ ウ ウ エ エ ヲ ヲ

⑤ キ イ ウ シヤウ ア ウ イ ウ^④
カ ク チ ウ 羽

ア つ ヒ つ ラ 一 ウン ケン

右、此はかせをもつてふしをしる也、節をつくるとしやうをさすとハ、はるかに違たる事也、ふしをさすハこれなり、
㊦ウしやうをさすハ^⑥、にこり字をわくる事をいふ也、

18 注一、謳にふしつくるはかせの事^① ㊦オ

(35丁ウと36丁オの見開き頁全体に縦向きに記す)

下 上当 スク也 ヒク ユリトムル スクニヒキ下
ハルトモ云

ヨセ下 ツク シラル ヒロウ^②

⑤ イ ウ シヤウ ア ア ウ ウ^④
キ ウ シヤウ カ ク チ ウ 羽

ア つ ヒ つ ラ 一 ウン ケン ㊦オ

右、此はかせをもつてふしをしる也、ふしをつくるとしやうをさすとハ、はるかにちかひたる事也、ふしをさすハ是也、しやうをさすといふは^⑥、にこり字をわくる事をいふ也、

注 東・拾図版参照

① 般に同じ

② 東に同じ

③ 拾はこの博士二つを「エ」とする

④ 般に同じ (イウアウイウ)

⑤ 東に同じく、「キウシヤウカクチウ羽」が「アイウエヲ」の前に置かれる

⑥ 東に同じ

19 ①一、口舌唇之三内之事、

ぬ、う、む^①、是を三内といふ、

うハこうなひ、又した、むハこうない也^②、入正^③につけて、ふつくちき、是三内、くきハこうなひ也、ちつハした、

①一、口内のくきの事、おく、こく、

そく、とく、ほく、もく、よく、

ろく、のく、ゑき、せき、てき、へき、しき、りき、ち

き、是口内のくきの次第^④、

②一、舌内のちつ之事、いち、きち、しち、りち、

りつ、せつ、けつ、是を舌内之ちつといふ^⑤、

③一、唇内のふ^⑥の事、かふ、かう、にう、なふ、ほう、き

ふ、しふ、しう、りふ、たふ、りう、たう、是ふう大事

^⑦、24キ

20 一、くの二字といふ事有、「是」ハきるゝ字なり、うくすつ

ぬ、ふむうるゆ、いきしちに、ひみい^⑧りい、

21 一、二字づめ三字つめの事、五音惣通を引、あいうゑを、此

五音のうちへひかれて行、したの字のうゑの字へ行を、あらためずして、ひかるゝまゝにていふを、二字といふ、三字つめといふを、此心にてゆり^⑨をさむる所の文字をつめて行を、三字つめといふ、ゆりひく所にて、三字つめある^⑩と心得へし、又拍子にてつむる事、二字つめに^⑪といふなり

19 ①一、口舌唇之三内之事、

ぬ、う、む^①、是を三内といふ、

うハこうなひ、又した、むハこうない也^②、[㊦]ウ入正^③に「つ」けて、ふつくちき、是三内、くきハこうなひ也、ちつハした、

①一、口内のくきの事、おく、こく、そく、とく、ほく、も

く、よく、ろく、のく、ゑき、せき、てき、へき、しき、

りき、ちき、是ハ口内のくきの次第^④、

②一、舌内のちつ之事、[㊦]ウ

いち、きち、しち、りち、りつ、せつ、けつ、是を舌内

之ちつといふ^⑤、

③一、唇内のふ^⑥の事、かふ、かう、にう、なふ、ほう、き

ふ、しふ、しう、りふ、たふ、りう、たう、

是ふう大事^⑦、

20 一、くの二字といふ事有、是ハき[㊦]るゝ字也、うくすつ

ぬ、ふむうるゆ、いきしちに、ひみい^⑧りい、

21 一、二字つめ三字つめの事、五音惣通を引、あいうゑお、此

五音の内へひかれて行、したの字のうゑの字へ行を、あらためずして、ひかるゝまゝにていふを、二字といふ、三字つめといふを、此心にて、ゆり^⑨をさむる所の文字をつめて行を、三字つめといふ、ゆりひく所にて、三字つめある^⑩と心得へし、又拍子にてつむる事、二字つめに^⑪云也、[㊦]キ

①ぬ、う、む↓う、ぬ、む

②むハこうない也↓むハしんない、ぬハぜつない也

③入正↓入声^ㄷ

④次第↓次第なり

⑤いふ↓云也

⑥ふ↓ふう

⑦是ふう大事↓これふうの大事也

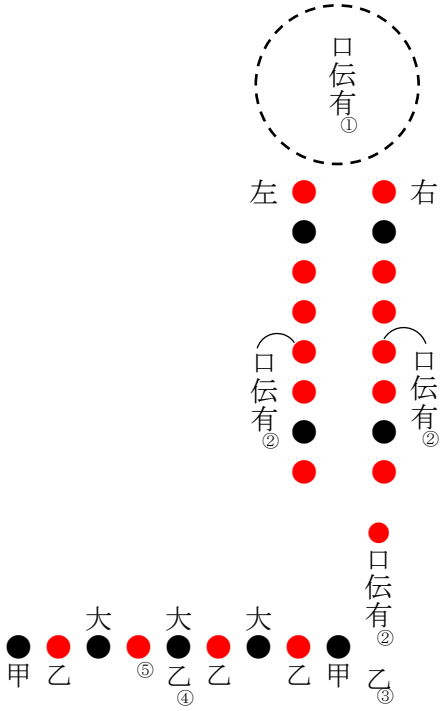
⑧い↓ゐ

⑨ゆり↓いひ

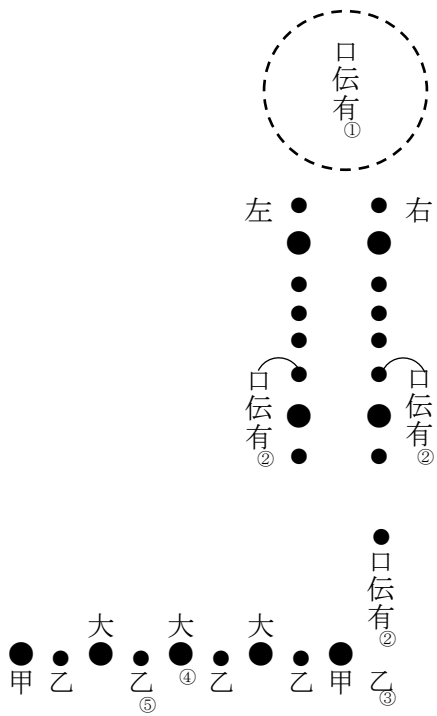
⑩ある↓あり

⑪に↓ナシ

(左は略図。円環は黒赤五個ずつの粒で描かれている)



(左は略図。円環は大小十個の粒で描かれている)



23 ^{注2} 一、拍子一字の事 (以下の本文横に拍子点あり、省略)

四方の雲もおさまり、一天のそらもあきらけき、
 久方の月の都の空よりも、
 秋つの外もへたてなき、君のめくみハつはね^⑥の、かけう
 ちしけきためしとて、
 や、かゝる御代そとつかふなり〜(〜)の右に

23 ^{注2} 一、拍子一字之事 (以下の本文横に拍子点あり、省略)

四方の雲もおさまり、一天のそらもあきらけき、
 久方の月の都のそらよりも、
 も、秋つの外もへたてなき、君のめくみハつくはね^⑥の、影
 うちしけきためしとて、
 らきや、かゝる[㊦]御代そとつかふなり〜(〜)の右に

注1 般・東とも、行の下部に

書かれ「一」と「輪」の間に△が入る。拾は行頭から書かれ、△ナシ。この条東・拾図版参照

①口伝有↓口伝在之
 ②口伝有↓口伝有之
 ③乙↓ナシ
 ④東に同じ
 ⑤東に同じ

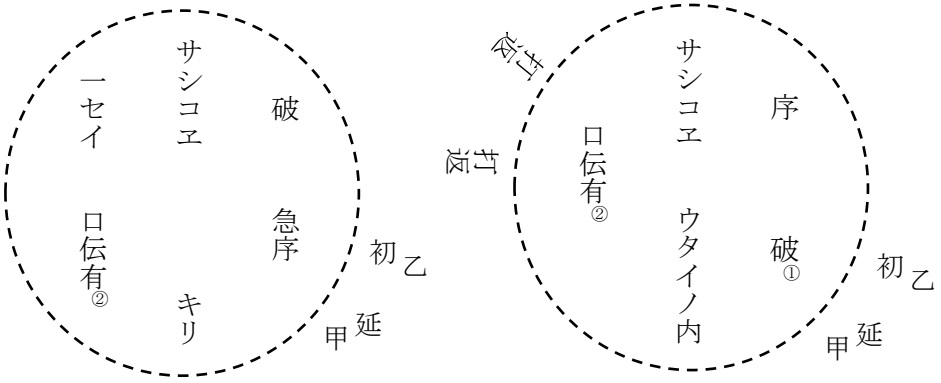
注2 東・拾図版参照

⑥東に同じ

⑦

24 注一、二輪

(左は略図。円環は黒と赤の粒で描かれ、外側の文字と結び付けられている)

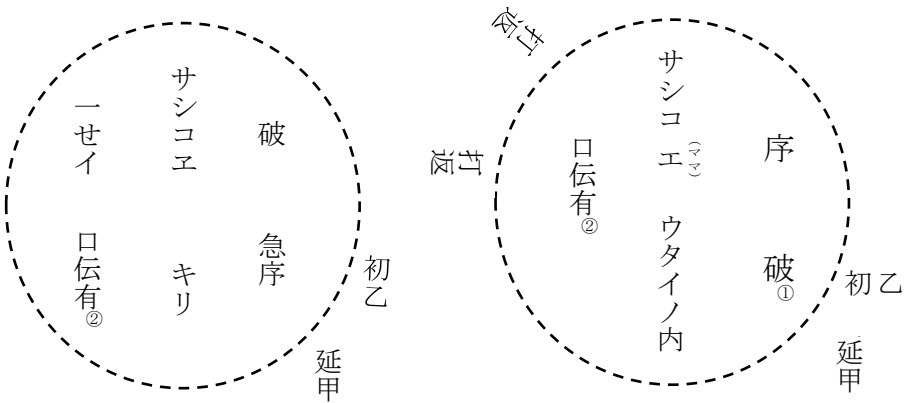


25 ㊦

右、おさなき者などに、拍子をつもりてしらすへしたため③なり、拍子心つきてハ、いらさる事なり、拍子の心なき者にハ、千度はをうたすへき物也、一輪つねに心かくへきなり、
㊦

24 注一、二輪

(左は略図。円環は大小の粒で描かれ、外側の文字と結び付けられている)



25 ㊦

24 ㊦

右、おさなきものなどに、拍子をつもりてしらすへしたため③也、拍子心つきてハ、いらさる事也、拍子の心なき者にハ、千度はをうたすへき物也、一輪つねに心かくへき也、

注 東・拾図版参照

①破↓ナシ

②口伝有↓口伝在之

③ため↓其為

25 一、字をいたすへき心之事、

イロハニホヘト チリヌルヲワカ

ヨタレソツネナ ラムウ井ノヲ^①ク

ヤマケフコエ^②テ アサキユメミシ

エヒモセス、

26 一、声の位は、宮といたして商と心得、徴といたして宮と心得、徴といたして羽とつめよ、此位をよく〜おほえへき物也、

事也、此調子をよく〜おほゆるならば、調子に合べし、

27 一、謡をうたひ出したる本尊の事、第一、是をしらすして、風俗風類一曲をすへからず、諷の本尊といつは、人丸なり、但日本に人丸三人有、柿本[㊦]人丸、しのふの人丸、田口の人丸、三人有、風そく風類一曲の人丸は、田口の人丸なり、是を本尊とあかめ、勸請してうたへハ、神慮にかなひ尤悦有、^{注2}

28 一、呂のこゑの稽古哥^③、

松門独閉送二年月、自不^レ見^二清光^一不^レ弁^二時遷^一、闇々於^二庵室^一徒眠、衣不^レ与^二寒^一且^レ膚凝骨衰^④、^{26ウ}

29 一、呂のこゑの稽古哥^③、

25 注¹ 一、字をいたすへき心之事、

イロハニホヘト [㊦]チリヌルヲワカ

ヨタレソツネナ ラムウ井ノヲ^①ク

ヤマケフコエ^②テ アサキユメミシ

エヒモセス、

26 一、こゑの位ハ、きうといたしてしやうと心得、ちうといたして久^{不審}と心得、[㊦]ちうといたして羽とつめよ、此位を能々おほえへき物也、

事也、此調子を能々おほゆるならば、調子に合へし、

27 一、謡をうたひ出したるほんそんの事、第一、是をしらすして風[㊦]そく風類一曲をすへからず、謡のほんそんといつハ、人丸也、但日本二人丸三人あり、柿本人丸、しのふの人丸、田口の人丸、三人有、風そく風類一曲の人丸ハ、田口の人丸也、是をほんそんとあかめ勸請してうたへハ、神慮にかなひ尤悦あり、[㊦]^{注2}

28 一、呂の声稽古哥^③、

せうもんひとりとちて年月を送り、みつからせひくわうを
ミされハ時のうつるをもわきまへず、あんなんたるあんし

注¹ 東・拾図版参照。拾では一文字につき同じ博士を二つずつ重ねる

注² 東に同じ

注³ エ↓エ

注⁴ 東に同じ

注¹ 東・拾図版参照。拾では一文字につき同じ博士を二つずつ重ねる

注² 東に同じ

注³ エ↓エ

注⁴ 東に同じ

注² 28と29の間に左の文入る
此一冊御所望別而御入魂故相伝之所如件不可有他見候秘事之内之秘事也

注³ 東・拾図版参照。拾の詞は現行金春流に同じ

注⁴ 哥↓謡

ニタン夏破也、ハナのタモト^④ハシカ^⑤、

ヲキノアフキ、一段^⑥、

カエス袂^⑥、雲ノ扇、

此内口伝有^⑦、

三段カワラ^⑧ノ、

破急、

アフキ段モ、

カワウ^⑨也、

破急序也、

破急也、

月ノソテ、ニキ^⑩ノタモト、^{㍻オ}

フキ^⑪ノアフキ、トムルアフキ、

四段アキ、ヨルノアフキナトトモ云也、

五段冬也、

右此一冊者於我等家音曲可謂奥儀去者別而御執心之段乍
斟酌写進候少モ他言不可有候者也 ^{㍻ウ}

永正元

正月吉日 観世道見(在判) ^{㍻オ}

(裏見返に29と同じ漢詩を記す)

つにいたつらにねふり、衣かんたんを^①あた^②い^③されハ、
ば^④だ^⑤へ^⑥ハけうこつとおとろへたり ^{㍻オ}

ニタン夏破也、ハナノタモト^④ハシガ^⑤マリ、

ヲキノアフキ、一段^⑥、

カエス袂^⑥、雲ノアフキ、

此内口伝有^⑦、

三段カワラ^⑧ノ、

破急、

アフキ段モ、

カワラ^⑨也、 ^{㍻ウ}

破急序也、

破急也、

月ノソデ、ミキ^⑩ノタモト

フキ^⑪ノアフキ、トムルアフキ、

四段アキ、ヨルノアフキナトトモ云也、

五段冬也、 ^{㍻オ}

右此一巻者於我等家音曲秘伝書別而不浅御執心ニ而
候間書写進之者也努々他見候者生々世々恨可申候者也

永正元

正月吉日 観世道見(在判) ^{㍻ウ}

①を↓に ②あた^い↓あたへ

③ばだへ↓はたへ

④タモト↓袂ハ

⑤般に同じ

⑥一段、カエス袂↓カヘス袂、

一段

⑦口伝有↓口伝在之

⑧カワラ↓カワウ

⑨般に同じ

⑩東に同じ

⑪拾も同じ(フキ)

(拾の奥書全文を翻刻する)

右此一冊者於我等家音曲之大事
為後学心持書置所也為一人秘曲
不可有他見者也
(年記署名ナシ)